

345 【三田市生活改善実行グループの県功労賞受賞】

「神戸新聞」 昭和60年 5月26日

農家生活の近代化へ 生産し食べ加工技術も

県功労賞を受けた三田市生活改善実行グループ連絡協議会長 向井喜久美さん
(中略)

昭和46年に初めて三田市に生活改善グループが誕生したときからのリーダー、県下各地の先輩グループに比べるとスタートは5、6年、遅れたが、すでに15年を経過した。「全市に広がる120人の会員が地味な活動を続けた成果が受賞につながったものと思います。私1人の力でなく、みんなにくださった賞だと思っています」と、謙虚に話す。さらに運動の底辺が大きく広がるよう努めていく方針と意欲も見せている。

—グループの生い立ちを簡単に説明して下さい。

「市農林部の呼びかけで生活教室や健康モデル教室がありましてね。それが土台になって、農業改良普及所のでこ入れて組織しました。母子、小柿、波豆川、沢谷、井ノ草、大原と6つの小グループできています。もっと仲間の輪を広げたいですね。いまは会員120人。発足して15年たちますと母娘の二代会員もでき、喜んでいます」

—活動のようすは？

「グループごとに月1回程度集まって、それぞれテーマに沿って学習しています。私どもの運動は、農家の生活サイクルに合わせて、農産物を生産し、食べて、加工する技術を開発し、台所へ普及させていくことなのです。農家生活を科学し、近代化するのが終局の目的です」

—活動の成果を2、3紹介していただけませんか。

「手近なところでは、余った花の苗を生産者からいただいてきて会員に配布、庭先で栽培して花いっぱい運動、グリーンクリーン作戦を進めるといった具合です。ナスやキュウリなど野菜の苗を会員にわけて生産し、食生活を改善する。衣服の改良を進めて農作業がしやすくする。大がかりなものでは、家を建て替えるとき、間取りや部屋割りを考え、台所、便所を現代の生活に合うよう近代化を図る一方で、農作業がしやすいよう農器具の収納庫、手洗い場所を使い勝手がいいように、工夫することを運動に取り入れています。」

—15年にわたって活動してきたなかで市民に喜ばれているものはありますか。

「水田利用再編対策が始まった52年から手作りみその製造を始めました。いままではすっかり定着してきたのではないのでしょうか。ブロッコリーの生産も、緑黄野菜で栄養価の高い食べ物なので会員に栽培、利用を働きかけたのがきっかけで、いまは三田市の特産野菜に育ってきました。農家には場所があるが道具がないということで洗濯台を考案、普及させたこともあるんですよ」

三田市が誘致して振興に努めている県都市対抗駅伝当日、甘酒の無料サービスで縁の下の方持ちになっているのもこのグループ。ながさか共働作業所、寝たきり老人などにも甘酒を配り、年末には自家生産物を持ち寄って、おせち料理を作って独居老人宅に届けるなど福祉活動も幅広い。(以下省略)

348 【農産物直売所「ほんまち旬の市」の再開】「毎日新聞」平成18年5月24日

旬の市 トマトやレタス、水菜、タマネギ 鮮度が良く安い!!

三田・本町通りセンター街 月、木曜日に営業

三田市三田町の商店街「本町通りセンター街」で、農産物直売所「ほんまち旬の市」が約1カ月ぶりに営業を再開。農家の主婦が自ら生産した野菜を対面直売する安心感などから、遠方に買い物に行けないお年寄りらで再びにぎわい始めた。

98年5月、商店街の八百屋(果物屋)が閉店したことから、約20人の農家が空き地にテントを建てて開設した。商店街に研究室を構える関西学院大総合政策学部の学生らも支援。「新鮮でおいしい野菜が買える」と評判になり同年10月、空き店舗を借りて本格オープンした。

だが、今年4月末、老朽化した店の建物が取り壊されることになり休業。営業再開を求める声が数多く寄せられ、新店舗を探していた代表の向田憲子さん(58)らの思いを酌んで、商店主らが集会所「ほんまちプチホール」の貸し出しを決めた。

店には、朝採れのトマトやレタス、水菜、タマネギなどが所狭しと並び、野菜本来の香りがあふれる。値段はスーパーより約1割安く設定。買い物客と農家が互いに料理法を教え合うなど、交流の場ともなっている。8年前の開店当時から通い続ける同市の主婦、河野千代子さん(57)は「ずっとこの店のファン。鮮度も良く値段も安い」。向田さんも「通い続けてくださったお客さんと再会でき、うれしい再オープンです」。

365 【有機の米づくりに取り組む】『さんだ 旬を味わう』平成11年

「三田の元気な生産者たち」インタビュー

有機の米づくりに取り組む 福西利治さん(須磨田)

「食生活を考える会」の中では一番の若手、武庫川沿いの須磨田で、米づくりを中心とする農業を営んでおられます。

長野県の農業大学校を卒業後、三田に帰り両親の元で米づくりを始めたのが20歳の時。当時は、父上と意見の合わない事も多く、試行錯誤の連続だったとか。それでも有機栽培への志は強く、15年ほど前に丹南町有機農業実践会に参加。その後、三田にも有機農業研究会ができ、消費者も参加して現在の「食生活を考える会」へと発展したのです。

「本気で農業を考えるようになったのは、30歳になってからでしょうか」と福西さん。私が彼に会ったのが、ちょうどその頃でした。

現在は、4町4反の水田で、うるち米2種、餅米、酒米をつくっておられます。水田でも同じ品種を続けてつくと、連作障害がでるとか。一度だけ除草剤をまく低農薬有機栽培ですが、何とか無農薬にしたいと、努力と研究を重ねています。消費者の信頼に応えられる米づくりを目指す熱意は人一倍です。

一方で専業農家としての収支は「農機具の支払いに追いかけて、大変です」とのこと。(以下省略)

330 【新規就農者の活躍事例】

「全国農業新聞」平成13年1月26日 「新規就農者訪問記」9

目標は経営規模の拡大

就農3年目—施設花き 三田市・荒本努さん(30)—ジャパンフローラ2000でも活躍
三田市の荒本努さん(30)は、平成10年から花壇苗の生産に取り組んでいる。昨年「ジャパンフローラ2000」の会場を飾る苗の生産を受託、品質の良い商品づくりを心がける姿には周囲の先輩農家も刺激を受けているという。

荒本さんは大阪生まれで非農家の出身。大学卒業後、大手量販店に就職し、食品を扱う仕事についていたが、野菜のセリなどに立ち会うなか、生産者に関係のないところで値段が決められる現実に歯がゆさを感じた。

龍野で半年間研修

その後、知人の勧めなどがきっかけで花壇苗の生産に興味を持ち県農業会議にも相談して就農を決意。平成10年2月に会社を辞め、龍野市の農業経営士のもとで半年間研修。また、農地の確保については三田市の農業委員の紹介で、ガラス温室と農地が借りられた。

まず、自己資金で温室の再整備に取りかかり、その後、県の認定就農者となり支援資金を借りて資材などを購入、花壇苗の生産を始めた。現在、経営面積は2,000m²で、その内ガラス温室は850m²、パイプハウスは150m²。

栽培するのは、アリッサムやパンジー、バーベナなど数十種類で多品目少量生産。最初は価格が安く、これでは困ると生産費計算をしてコスト低減に努めた結果、見通しが立ったという。

夫婦で地域に交流

荒本さんは現在、地域の農業青年らで組織する「三田耕楽クラブ」の一員として若い農業者との交流を深め、奥さんのたまみさんも女性農業者グループの「グローバルレディーさん^(た)」に参加し地域にとけ込んでいる。「今後の目標は経営規模の拡大。栽培技術の向上にも努めたい」と荒本さん夫婦は意欲的だ。

355 【ゆりのき台自治会と三田耕楽クラブが朝市で交流】

「神戸新聞」平成10年5月8日

ゆりのき台自治会 三田耕楽クラブ 住民と農家 朝市で交流

直販で活性化目指す あす初市 取れたて野菜、ハーブ苗

(中略)

昨年12月に開いた「三田まちづくりフォーラム」(神戸新聞社主催)の事前分科会で、同自治会役員だった野上和雄さん(52)と、耕楽クラブの前会長、宇上靖明さん(30)=上内神=が会ったのがきっかけ。

ニュータウン内には「緑豊かな三田にきたものの、身近な農作物はどこで購入したらいいかわからない」との声がある。一方、農業者の間では、「消費者と交流し、農業を活性化させたい」という願いも根強い。

2人は、そうしたニーズを持ち寄り、「一過性のイベントではなく、長く交流し合える場に」と一致。朝市を提案したところ、双方の組織内でも大歓迎で、話は進んだ。

朝市は第2、4土曜日の午前10—11時。ゆりのき台コミュニティハウスのテラスが会場。もちろん同地区以外の人参加OK。9日には、シイタケ、ハウレンソウ、レタス、トマト、母子茶、ハーブなどの苗、特産のみそなどが並ぶ。季節や天候で種類や量は変わるが、これも地場野菜ならではの楽しさ。

同自治会は、全国でも珍しい自前のホームページを昨年2月から運営し、街づくりを実践。朝市は、住民ニーズに根差した交流事業となる。

宇上さんは「朝市から市民農園や農業体験もできるような間柄になれば」と期待し、野上さんも「これをきっかけに、新旧を超えて輪が広がれば」と話している。

(以下省略)